



写真集でめぐる一九三〇年代関西モダニズム

松實輝彦

小石清

第3回

## 『撮影・作画の新技法』

モダニズム期の関西写真界は多くのスターを輩出した。燦然と輝く花形写真家たち。そのなかでも絶対的センターといえる存在が、小石清である。一九〇八年、大阪に生まれた小石は高等小学校を卒業後、写真材料商の浅沼商会に勤め、そこで写真技術を習得する。二十歳になった小石はアマチュア写真家団体の西の名門・浪華写真倶楽部に入会するや、めきめきと頭角を現していった。

一九三二年、朝日新聞社主催の競技会「第一回国際広告写真展」に「クラブ石

鹼」を出品すると、並みいる強豪たちを抑えて一等・商工大臣賞（賞金一千元）を受賞する。間髪を容れず翌年の倶楽部展に出品した「初夏神経」（十点連作）は、写真界全体に大きな衝撃を与えた。倶楽部の重鎮・米谷紅浪は「全く文字通り目ざむる計りの新鮮さをたぎらせて澆瀨と登場した」と感嘆の声を上げ、東京の写真評論家・森芳太郎は「阪神写壇の飛將軍小石清君の名は、天下既に喧伝、また僕なんどの推挽を須<sup>もち</sup>ひない」とシャッポを脱いだ。

一九三三年、小石は先の写真それぞれに自作の詩を添えた写真集『初夏神経』を同倶楽部より刊行する。アルミ合金と思われる金属板の表紙にリング綴じ製本という世界的にも類のない装幀で、定価は六円だった。日本のモダニズムを代表する写真集として現在では世界中から絶大な称賛を浴びているが、当時の反応は冷たく売れ行きもさっぱりだった。倶楽部の後輩写真家である本庄光郎は後年、「斬新な大型写真集として出版されたが、売れたのは僅かで大部分は残本と



なった。先駆的画家の作品と同様、当時の人たちの理解を超えていたのである」と述べた。

だが、それしきのことで花形写真家はへこたれない。次から次へと展覧会や競技会に応募しては受賞を重ねる凄腕の賞金稼ぎとしての営業活動と併行しながら、新たな著作を準備していた。そして一九三六年、玄光社より『撮影・作画の新技法』が出版される。三百頁におよぶ函付の上製本で、定価は二円五十銭。装幀は抽象創作版画の先駆者でもある恩地孝四郎。版元による宣伝惹句は次のごとし。「小石清氏の、清新なる作品と傑出せる画面は、いかに撮影し、いかに作画されたか？ 小石氏独自の秘法とその苦心の新技法は、茲に初めて余す処なく公開された。(…) 前人未到の新分野、撮影作画の新技法は懇切なる文章と豊富鮮麗なる説明写真により、初心者も直ちに会得し、実行出来るやう詳述された。全

写真家の一大福音！ 今こそ全写真界に誇り得る、この新技法を会得して、更に写壇に雄飛せられよ」。

著作の内容は赤外線撮影、ソラリゼーション、合成写真、ペルゾン法といった多様で特殊な撮影方法についての具体的な指南であった。ただし、掲載画像はすべて小石自らが撮影したもの。タイトル表示のある完成作品は五十点以上、それらの作品制作に関わる個々の原板も九十点に上り、それらが全頁にわたって満載された、いわば小石の写真集でもあった。花形写真家の捲土重来を期した渾身の技法書／写真集は瞬く間に評判を呼んで、天晴れ大いに売れたのである。

それでは著作から「合成写真」の章にスポットを当てて、そこから関西フレーパーが立ち昇る写真作品を見てみよう。最初に取り上げるのは「都会の夕暮」である。これは二枚の原板の引き伸ばしによるモニタージュ作品だ。二重写しと

なった女性の顔と大阪の表玄関である阪急百貨店がモチーフとなっている。ある日の午後、喫茶店で一服していた小石に、作品のアイデアが不意に訪れた。そのときの様子はこうだ。「顔の部分が二重となつてゐるのは、モニタージュではなく、ドアの硝子の周囲に少し傾斜して磨きをかけてある部分を、斜めから見ると、接近したものはこの画のやうに、二重の映像に見えるのであつて、コーヒーを飲みつゝ、ふと気付いたので、この面白い現象をなんとか写真として活かして見たいと思ひ、早速撮影すべく喫茶ガールを立たして撮影したものであります」。

大正から昭和へと時代が移り、みるみるうちに大阪がマンモス都市へと騒々しく膨張すると、人々はひとときの憩いとくつろぎを求めて足繁く喫茶店に通いはじめた。小石もその利用者の一人ではあったが、花形写真家はコーヒーを飲んでいるときでも気を抜いたりはいしない。





「都会の夕暮」

当時は大阪市東区（現・中央区）に「小石アド・フォト・スタヂオ」を構えていたので、その近所であろうと思われるが、どこの喫茶店かは不明である。ただ、その場で「喫茶ガール」に一声かけて気軽に撮影していることから、馴染みの店であり、馴染みのスタッフだったのだろう。その当時、店の女性スタッフには客のリクエストに応じて蓄音機を回す「レコードガール」や、楽しい話題を提供して客を飽きさせない「スピーキングガール」といった細分化された仕事をこなすものもいた。店のドアにもたれて二

重写しの微妙な表情をみせる彼女の業務内容はどうだったのか、少々気になるところではある。

次に当時発表されたばかりの「泥酔夢」（三点連作）から「感傷」を取り上げよう。この作品は四枚の原板からなり、移動モニタージュという技法を用いて制作されている。背景が灰色以上の濃色に限定した原板を「再製する場合に、その原板を移動するのであつて、この原板を移動する時に、種々の速度を利用すれば、意図のまゝに、自由に行ふことが出来るのであります」。その技術を活用すれば「音響的効果のある作品や、スピードのある作品が種々と出来るのであります。また視覚的にいつても、動感のある、そして立体感に富んだ作品が」出来るでしょう、とのこと。

技術面についてはなかなか理解が追いつかないが、作品を見るにあたって関西フレイバーという点から興味深いのは

個々の原板に共通するモチーフである。小石はそのモチーフについて次のように明言している。「大阪道頓堀のグラントパレスといふ、キャバレーの内外観を撮影したのですが、挿画第一図は、舞台に於ける踊りのスナップであり、第二図は内部にあるネオンライトで、第三図は外観のネオンライトであり、第四図はサービスガールを撮影したものであります。この四枚の原板を使つて、一枚の印画にモニタージュするわけです」。

昼夜にわたつて往来の絶えることのない戎橋の近くに、道頓堀名物のキャバレーとして「赤玉」と並び称される「グラントパレス」は一九三五年に開店した。その店内のネオンサインやステージ上でのダンサーたちの情景などは風俗資料としても興味深いものである。また「サービスガール」はいわゆる接客専門のフロアスタッフのことであろう。華やいた雰囲気微笑する彼女が手にしてい

るクーブ型のグラスには、なみなみとシャンパンが注がれている。

「感傷」は連作「泥酔夢」の最初の作例であり、続いて「快感帯」、最後に「疲労感」が制作される。この中で広く知られているのは「疲労感」だろうか。夜の大阪の上空を巨大な時計の文字盤が蛇行しながら飛行するシニールな表現である。シリーズ全体について、小石は次のように自己解説している。

この「泥酔夢」と題した連作の三点は、昭和十一年度の浪華倶楽部展に出品したのですが、その時には、どうも判らない作品だ——との批評を受けたものですが、私は酔っぱらひの作品等は、今迄に誰れも作つてゐないので、この移動モニタージュの技法によつて、その表現を試みたのであります。またこの画は判らないのが当然で、作つた私でさへもこの画程度にし

か、酔つた時の感覚が湧いてこないのですから、致し方ないでせう。／美しい夢を画面の上で描くのも良いでせうが、醜い夢を写真として表現するくらの勇気があつても良いのではないでせうか……。

発表時は不評だったとあるが、高度なモニタージュ技法に支えられたこの連作は、一九三〇年代のモダン都市が発する幻想的かつ夢魔的な光景を見事な浮遊感覚で捉えたイメージ集として、現在では高く評価されている。それにしても撮影



「感傷」

の取材費用として、一体どれくらいの酒代が注ぎ込まれたことであろうか。

その後、小石は国家の要請を受けて従軍写真家となり対外宣伝活動に専念する。だが戦局は悪化の一途をたどり、大戦末期の度重なる大阪空襲によつて家屋からネガやプリントまですべてを焼失してしまう。戦後は関西を離れて、九州の門司（現・北九州市門司区）へと転居する。心機一転、新天地での写真活動の再開だった。戦争体験を経て、さらなる深みを増したその新作が期待されたが、一九五七年に急逝する。好きなアルコールが招いた奇禍だった。飲酒後に博多駅構内で転倒したことによる脳内出血がその死因とされる。享年四十九。類まれな才能と確かな技術で全国の写真ファンを惹きつけ魅了した花形写真家の、関西写壇における絶対的センターの、早すぎる突然のお別れであった。

（名古屋芸術大学 まつみ・てるひこ）